

CLONE

斬刃

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類が崩落した後、mugenというデータを元にして作られたクローンの新時代から始まる。

(注意) この小説には以下の作品が含まれています。

kof

アルカナハート

mvsmまたはmvc

サムライスピリッツ零SP

アカツキ電光戦記

e t c :

目次

運命の出会い	—	B e g i n	K r i z a l i d		1
	12				

Begin Krizalid

2099年

世界の人類が僅かとなり、代わりに大量のクローンが生きる世界に変貌していった。

人類が全滅する前の話、研究者がクローン生成を研究していた。クローンにはMUG ENというデータから人が生成され、研究室から生まれ育っていく。

記憶を改竄され、どのように生まれたのか、

彼らのデータにはいろいろな異能が組み込まれており、格闘術、魔法等の架空なものを自分の手を出すことができていた。しかし、mugenのデータ内にある悪役もまた作られたことにより、生み出された闇を纏ったクローンが暴れ、一度研究所が破壊されかねなかったことがあった。

なんとかそのクローンを撃破し、彼らが二度と悪さをしないために異能を封印する。その力を開花させないように組み込んだ。

そして、研究者のほとんどが死に絶え。残された大量のクローンが世界に散らばっていく。しかし、それぞれの生き残った研究者はとあるクローンを隠れて大事に育ててい

る。本来支持されてないクローンを育むのは禁止されていたが、極めて僅かな研究者は密かにクローンを作っていた。

同時に、過去に大暴れていたクローンは闇を分散させ、その闇を年月が経つごとに成長させていく。研究者の知らない間に、見えない場所で彼らは変貌していった。

2112年

建造物はクローン達によつて復興しており、歴史や文化は滅んだ人類が積み重ねてきたものを再利用している。既存されていた技術と歴史、文化などが占めていた。平和に暮らす人々は自分達の異能力のことなど何も知らない。

これら既存しているものが、生き残ったクローン達はどういった過程で手に入れたのか誰もわからなかった。

学校で平穩に過ごす生徒達

仕事で忙しい社会人

外でよく遊ぶ子供達

人類が滅んでも、人間社会の風習は消えることはなかった。そんな平穩を乱す輩が全くいないというわけではない。

「だ、誰か助けてくれ!!？」

無機体の名はザク、それらが一斉に一般市民を無差別に襲っている。しかし、この地を守る警官や政府は誰一人いない。

ならばどうやって犯罪者を懲らしめているのか、この地を守るのはこの場所を統治していた強者^{つわもの}

「キャプテンコマンドー！見参!!？」

まずヒーローが登場し、正義の鉄拳でザクを殴り倒す。ザクの一機が人をさらい、空を飛んでビルの屋上まで登っていく。

下にいる人々はキャプテンコマンドーしか守れないために他が動くしかない。人を攫ったザクをアドラー、クリザリッド、牙神幻十郎の3人で追っている。

「たっ、助けてくれえ!!？」

クリザリッドは迷っていた。今ここで必殺技を出してしまえば他の人にも当たってしまうと。

彼の焰ならザクを焼くことは可能だが、同時に人質になっている人も焼いてしまう。「何をしている！躊躇なく潰せ！」

アドラーがそう叫んでも、クリザリッドは動けない。彼が動く前に牙神幻十郎が飛びかかる。彼の持っていた刀でザクの腕を切り落とし、人質を解放された。

「クリザリッド！」

「!? あつ、ああ!」

クリザリッドはデュホンレイジでザクを蹴り飛ばし、ザクはビルから落ちていった。上空にいる赤い機体、ナインボール・セラフが市民がかなり遠くに避難して離れることがわかると、

「目標発見、速やかに破壊する」

最終的にその機体が上空から大量のザクを狙い撃つ。複数いたザクは砲撃を受けて木っ端微塵になった。

*** **

この世界ではそれぞれのクローンが離れ離れになって以来北西、北東、南西、南東というふうに分かれていた。彼らが住んでいるのは南東で平穏に暮らしていたこと。

組織を作り約10人で集合し、その街を収めていた。10人にはタロットに分別されて分けられている。

その中の一人にクリザリッドはいる。

1 D. A R K (死神)

2 W A R K I A (悪魔)

3 皇帝 (皇帝)

4 ゲツコーモリア（戦車）

5 アドラー（力）

6 牙神幻十郎（節制）

7 クリザリッド（審判）

8 キャプテン・コマンドー（正義）

9 ナインボール・セラフ（太陽）

10 シール（運命）

1と2と10は会議にはあまり来ておらず、戦闘にも参加していない。残りの7人でこの街を守ってきた。

今回の問題の件については彼らにとって大事のものだった。襲っているのはザクだけではなく他の無人機も別の場所で一般市民を襲い、大暴れしていた。

「最近、他の機体が暴走している。機械の担当であるナインボール・セラフ：どういうことか説明してもらおうか？」

「残念ながらあの機体は我々の方で生産していない。別のところから送られている」

ザクの残骸をいくら調べてもそこから出てこない。ゾルダート兵士が過去にナインボールセラフの基地を調べたところザクを作る資料を持ってない以上、犯人だと断定で

きないからだ。

アドラーはザクの襲撃の問題よりも、クリザリッドの失態について切り替えるように話を変えた。

「それよりもクリザリッド、貴様なぜあそこで躊躇した」

「それは…人質が」

「人質を優先するより、機体の破壊が何より大事なことではないのか？」

皇帝とアドラーに言葉責めされている。この二人はたとえ人質がいがようが、犠牲を出しても人質ごと倒す。

しかし、クリザリッドはその状況に対して『迷った』こと。

「我々は正義の味方ではない」

「私は彼がしたことは正しいと思っっている！あそこで動けないのは仕方ないことだ！」

「熱血バカは黙ってるよ。そいつがハマしたら責任問題でそいつが降りてただろうなあ？」

キャプテン・コマンドーはクリザリッドを擁護するが、二人だけではなくゲッコモリアもまたクリザリッドの行いを否定する。

「貴様っ！！？」

「キツシツシツシ！人間風情が俺とやりあおつてののか？」

キャプテン・コマンドーは変身して、ゲツコーモリアと戦う姿勢になる。ゲツコーモリアの方は巨大な剣を用意して、振り下ろす。

が、その剣は刀によって遮られた。

「ハア…両方ともよさんかい、今はいがみ合う場合じゃなからうて。

この話し合いは仲間といがみ合うための無意味なものなのか？ さっさとこんな馬鹿げだ連中を突き止めんと、またあの機体が襲うぞ？」

「チツ」

腕を組んで黙っていた牙神幻十郎が、二人の争いを止めた。ゲツコーモリアは白けて自分の席に戻り、キャプテン・コマンドーは変身を解いた。

話し合いはクリザリッドの失態から、ザクの問題へと戻された。

「一番の問題は、その機体がどこから送られてきているのかということだ」

「見つけ次第、ゾルダートの軍勢を呼んでその国を襲撃するでしょう」

会議はこれにて終了となり、みんな席を立てて帰ろうとする。

クリザリッドは立ち上がってキャプテンコマンドーと牙神幻十郎の二人に咄嗟に

謝った。

「…不甲斐なくて、すまない」

「君は、何も悪いことはしていない」

牙神幻十郎はそのまま帰って行ったが、キャプテンコマンドーはクリザリッドの肩を手に触れて励ました

彼らが入り口に向かう途中でクリザリッドの携帯電話が鳴った。

「どうしたの？」

『た、大変です！基地本部にあの機体が押し寄せ……うわあああつ……』

大量のザグが本部に侵入して、襲ってきた。クリザリッドとキャプテン・コマンドーは協力し、殴って破壊。牙神幻十郎は既に真つ二つに斬り伏せている。他のメンバーも苦戦することなくザグは駆逐されていった。

「なぜこの場所が……」

今までは街の至る場所を狙っていたが、今回司令部を狙われることなど異例中の異例だった。

「そんなもの決まっているだろう……この中に……」

——裏切り者がいるということだ

アドラーはクリザリッドの疑問にそう答えた。この基地を知るのは基地内にいる人達だけ。しかし、その彼らの中に『裏切り者』がいるという言葉にメンバーだけではなく基地内で働いている人達の誰もが疑心暗鬼になっていた。

クリザリッドは自分の家に帰っていくと、そのままベットで倒れこんでしまった。

「……ただいま、先生。今日は大変だったよ」

彼を生み出した博士の名は『Dr. フアラ』

彼女は研究のプロジェクトの途中でクリザリッドを作り出した生みの親である。

彼以外にも他にクローンを生み出したが、一体どんなクローンを製造したのかはクリザリッドもわからない。資料もなく、彼が目を覚ましたのはまだ幼い頃のままだった。

クリザリッドは自分以外に誰かいたような気はしていたが、全く記憶にない。彼女が死んだ後に大人と同じ身体へと成長して外へ出た。

生まれ方が特殊であつたためか、能力はすぐに使用でき、自分の保身のために彼らのグループに参加した。

どうやって参加したのかというのはキャプテンコマンドーの目の前で力を使ったこと。彼らもまた能力を扱い、敵を倒している。力を使うクリザリッドの存在は、もし敵にまわつた場合街で大暴れすれば危ういために、自分達の側に引き連れ、こうして働いている。

彼はベットから起き上がって、何か食べようとキッチンに向かうが、机の上に書き置きがあつた。

夜の7時に教会に來い、さもないと裏切り者だというのを市民に晒すというのが記されていた。もしこれが事実なら、行かなかつたことだクリザリツドを処分しろという市民の批判の聲が出る。

「脅迫か……しかし、放っておくわけにもいかないか」

クリザリツドは紙に書いてある地図を見て教会へと向かう。その教会は外側も内側も綺麗なままになっており、どんな攻撃を受けてもビクともしないように異能力が施されていた。

クリザリツドは正面から教会に入り、中を見渡すと誰も人がいない。

クリザリツド奥の方を確かめてみると、シスター達は倒れていた。彼女らの首元を確認し、意識があることを確認する。

(よかつた……)

クリザリツドはホツとするもの頭上から、凶器が襲ってくる。

それに気づいたクリザリツドは鎖についていた刃を素早く避けるものの、今度は空中で浮いている機雷が爆発する。

爆発は受けたものの、ちゃんと防ぐことができた。

「へえ、最初のやつは避けたんだ。やるじゃん」

「誰だ!」

クリザリッドが声のする方に振り向くと赤いツインテールの少女が教会の正面ドアの近くで立っていた。彼女は鎖を用意して、クリザリッドに殺意を向ける。

「こっちは貴方の暗殺を命じられてるの、悪く思わないでね。殺してあげる」

そう言って彼女は、異能力で教会内に結界を張って彼を逃さないようにする。

運命の出会い

結界を張られている教会内では二人が大暴れしている。外部からの侵入を妨げている以上、助けを大声で呼んだところで二人しかないこの空間では何の意味はなかった。

「喰らえー！」

「くっ…！」

全方向から襲ってくる鎖と既に空中に設置された機雷がクリザリッドを襲う。広い場所での戦闘では彼女の方が有利であるため、クリザリッドは苦戦を強いられている。対して彼女の方は近く中距離を鎖で攻撃し、遠距離で機雷で爆破させる。懐に入ろうと接近しても、鎖に拘束されかねない。

それでも、彼は彼女へ向かって走っていく。

「死ねっ！」

「デュホン・レイジー！」

最初の方は防ぐだけで精一杯だったが、彼女が動いていくうちにどこに滞在するか検討がついていた。彼女は逃げ回りながら、彼を誘っている。

「…そこだ」

「つつつ？」

クリザリツドは炎でコートを羽織り、紫の焰を一気に飛ばす。焰玉は見事に少女に当たる。コートは近くにあつた機雷の爆撃を軽減させ、そのまま燃え尽きた。

悶えているものの死ぬほどのものじゃない。クリザリツドの方は彼女に聞きたいことがあるために、まだ手加減していた。

「遠距離から何度も襲っていけば、防いでいくうちに君が何処に逃げるのかすぐにわかる。」

なぜ私の命を狙う？」

「…ねえ、舐めてんの？」

クリザリツドは彼女のような鎖を用いたりして広範囲に特化した攻撃することはできないが、遠距離の攻撃が全く無いというわけではない。

少女だからと手加減していたことに、彼女は憤っていた。

「殺す！！？」

少女は遠距離で狙うことをやめて彼を接近して殺そうと襲いかかる。クリザリツドは迎撃する為に、拳を突くが彼と彼女が近づくと鎖が拳を遮ってしまう。

彼の拳が鎖に阻まれて彼女に届かない。

「命令、支援」

更に彼女もずつと手加減をしていたために今度は本気を出してきた。彼女は狼に似た機械を出現させ、実弾を撃つてくる。クリザリッドの方は少し驚いてはいたものの、その攻撃を何とかかわした。

(バルドウール…実際にあったとはな)

バルドウールは北欧神話フェンリルをモチーフにして作られたものであるがどんな異能なのかは彼には分からない。

「ほらほらほらほらあー！」

避けたものの腕に鎖が絡まれ、今度は柱に身体をぶつけられていく。狂気のみを見せられている少女に鎖を振り回されているが、その鎖を逆に利用する。ひかし、

「ふんー！」

「なっ…っ？」

少女よりも彼の方が腕力が圧倒的に強く、やられたふりをして隙を伺っていた。腕につけられた鎖を勢いよく引っ張り、モーメント・ペネトレーションで吹き飛ばした。

(これで気絶してくれば…)

「ケホッ…ゲホッ!!？」

彼女は気絶せず、思い通りにいかないことに苛立つ。鎖はまだ壊れていない、機雷も残機がある。そのことを確認して微かに笑う少女はまたクリザリッドに襲いかかってきた。今度は真正面から投げつけ、腕で防ぐよりも避ける方を選んだ。彼が鎖を避けた事を予測した彼女は勝利を確信した。

(そうくると思ってた！)

「命令、バルドウール…皆殺し!!？」

鎖を引き戻し、バルドウールを召喚。ビームがクリザリッドに向かって放たれ、直撃する。結界がまだ保ってはいるものの、教会内にある物はほとんどがその少女のせいで破壊されていく。

大爆発を引き起こし、少女の周辺は焼かれていた。

これでクリザリッドを始末したと確信したが、彼は立ち上がる。

「!!?…:め、命令つ…最大攻撃つ!!?」

少女は起き上がった彼に驚き、機雷を複数用意し、もう一度にバルドウールで砲撃を放つ。

ーー見せてやる！我が力を!!？

対してクリザリッドはエンドオブ・ヘブンで砲撃を防ぎ、その場でライトニングデイズスターを発動。

機雷を発動させるよりも早く、攻撃が少女に届いた。

(う、そ…何をされたの?)

教会は半壊状態だった。

クリザリッドがああのビーム砲撃を喰らって生きている理由は、炎で作ったコートで軽減させ、辛うじて生き残った。

「君の衣服が焼けてしまったな…」

クリザリッドは炎でコートを作り出し、そのコートを半裸の少女に着させ、この教会から急いで出ていく。結果は破壊されており、少女を家に連れて行くこうとする。

「殺さ…ないの?」

「殺すかどうかは私が決める。君の持っていた武器は回収させてもらった」

負けて身体も動けずにいた少女には、このまま殺される覚悟はあった。仮に生かされたとしても、拷問されるんじゃないかという事も理解している。クリザリッドを始末すると命令され、教会を使って襲おうとしていたのに彼は優しかった。

「変な人…貴方を殺そうとしたのに」

「誰かの指示なのか?」

それとも私を恨んでいたのか？」

情報通り彼は優しいということとは少女は知っており、このまま腹部を指す事も可能だ。

だが、彼女はそんなに気なれなかった。

「暗殺者として、襲った…」

「そうか…」

「…何やってんの、アンタ。もしかして私を家に連れて帰ろうとしてる？…馬鹿じゃないの？」

こんな少女に暗殺を依頼した相手をクリザリッドは許せなかった。

少女を背負って帰ろうとする。

「君を、このまま放置にするわけにはいかないだろう。」

それに君は、泣いていた」

「へえ…あたし、泣いてたんだ。」

気づかなかった」

（それに、ただ単に私を殺すつもりなら…教会の人質を使つてでも果たそうとしているはずだ）

教会にいた人達は意識を取り戻しておらず、まだ気絶している。確かに防音や被害を

考慮した上で結界を張ったのは正解だが、彼らの命を尊重していないのならば人質ごと連れてきた事も考えられる。

「ねえ…まさか、あたしを生かして、一緒に暮らそうと言わないよね？」

「…そうだ」

「アンタ以外にも殺したりしてるんだよ？こんな穢れた私を本気で受け入れるの？」

「いいや、君は綺麗だ。生きて戻ったところで居場所があるかもわからんだろ」

ほんの少し、照れつつも少女の顔が赤くなつる。荒々しい口調が、可愛らしく拗ねていた。

「ああもう…好きにして。」

もう、どうなつても知らない」

「フフツ…そうか」

彼女の反応に、彼もそれに微笑んでいた。

「あと、アンタが所属している組織もそうだけど…この町を守ろうとする連中だつて当然いる。」

この町は、アンタの考えを認めない人の方が多い。こんな事が知れたらどうなるか分かつてるよね？私を殺さず、保護するっていう事がどういう事か」

「ああ、分かっている」

この少女を守るために、情報を嗅けながら町を守ろうとする精鋭と戦わなければならない。少なくともクリザリッドのいる組織には、襲われている事がバレている。

キャプテンコマンドーや、牙神幻十郎のように擁護してくれる味方もいるが、殺そうとした暗殺者をただ保護するなんて今すぐに引き渡せとアドラーや皇帝辺りが要求してくるだろう。しかも今回の件は、クリザリッドの独断な為二人がそれを聞いたら弁護出来るかどうかも怪しいと考えてしまう。

(もし彼女が私に心を開いてくれれば何か分かる。私を狙った理由も、裏で何かが起きているのかもしれない)

家にたどり着き、押入れから布団を引っ張っていく。着替えもパジャマではなく身軽なスポンとシャツしかなかった。

「これぐらいしか用意できなくてすまない。

今日は許してほしい。

名前を覚えてくれないか、なんて呼べばいい？」

「シャルラツハロート…」

「そうか。では、シャルと呼ばせて貰う。

これからもよろしく」

仲間が少ない彼にとって、暗殺者として襲ってきたその子を返り討ちにして殺す事も

なく、保護して守るために戦う道を選んだ。この二人との出会いが、彼女を殺さずに生かす彼の決断が、これから進む過酷な運命へと向かう事となる。